聞こえているように見えても
聞こえにくい、難聴のある子どもたち

軽度難聴や片耳難聴がある子どもへの理解と支援のために

「難聴」とは、聴力がある程度低下し、音が聞こえにくい状態をいいます。その程度が軽度の場合、周りの人がその人の聞こえにくさに気づかない場合があります。

子どもに軽度の難聴がある場合、家族や本人も気づかず、発見が遅れたり、発見されても大きな問題と見なされないことがあります。

本資料では、軽度難聴や片耳難聴のある子どもが、まわりの人々から理解されよりよく支援されることを願い、次のことを説明しています。

- 子どもの暮らしに生じる困難さ
- 子どもの成長への影響
- 支援のあり方
- 難聴にかかわる基礎知識

大人から見て、聞こえている、わかっていると見えても、
聞き違えているかもしれません。わからなくて困っているかもしれません。

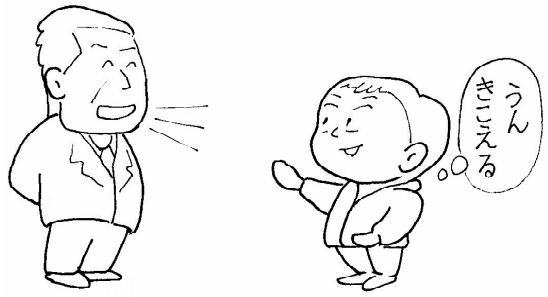
発 行　さっぽろ子どもの聞こえ相談ネットワークを作る会
編 集　札幌市立学校 きこえの教室

子どもの暮らしに生じる困難さ

子どもに軽度難聴等がある場合、会話音の一部は聞こえても、一部は聞こえないという困難さがあります。それでも本人は理解しようと気持ちを集中して聞いたり、口の動きを見たり、話の前後関係から聞き取れなかった部分を推測して理解しようと努力をします。その結果、状況によっては理解できる場合がありますが、状況によっては理解できなかったり、聞き間違えてしまう場合もあります。

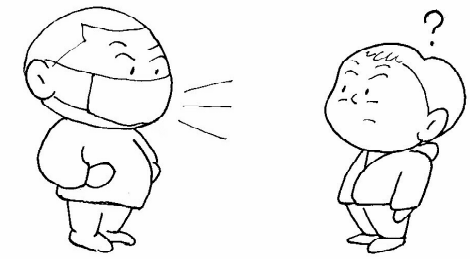
例えば、以下のような場合です。

しかも、理解できる場合があるため、まわりの人から見ると「聞こえている」と「誤解」をされることがあります。会話が理解しにくいという困難さがある上に、「その困難さがまわりの人々に理解されにくい」という困難さが重なります。



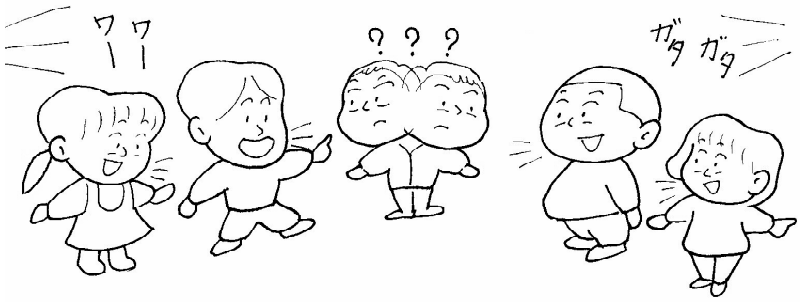
静かな場所で、１対１の会話で、日常的な内容であれば、会話が理解できる。しかし・・・

少し離れただけで聞こえなくなる。

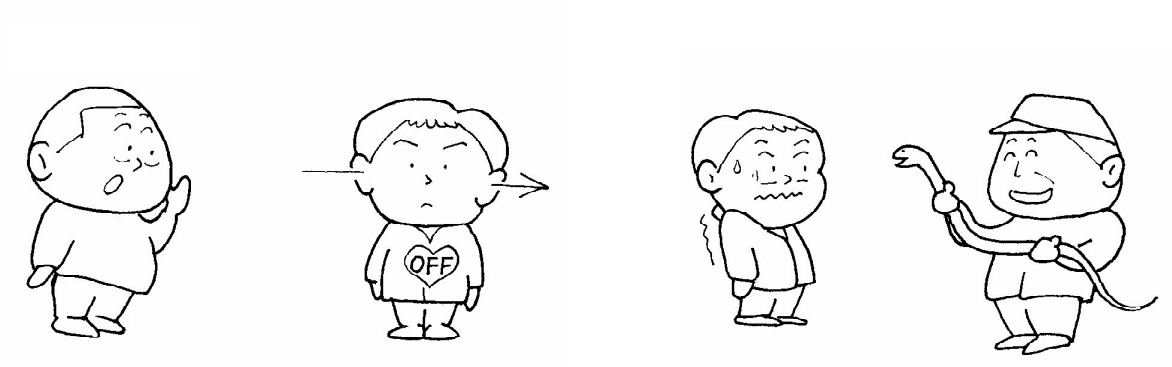


口の動きが見えないと理解しにくい。

初めて聞くことばは理解しにくい。



相手が複数だと理解しにくい。　　騒音が大きいと理解しにくい。



集中力が切れると聞いていられない。　　不安になると聞いていられない。

・声が大きいと聞こえやすいが、小さいと聞こえにくい。
・距離が近いと聞こえやすいが、離れると聞こえにくい。
・静かな場所は聞こえやすいが、周囲の騒音が大きいと聞こえにくい。
・聞こえる耳の側は聞こえやすいが、聞こえない耳の側は聞こえにくい。

・ゆっくりした話は理解しやすいが、早口の話は理解しにくい。
・話し手の口の動きが見えると理解しやすいが、見えないと理解しにくい。

・知っていることばは理解しやすいが、初めて聞くことばは理解しにくい。
・話題がつかめると理解しやすいが、話題がつかめないと理解しにくい。

・相手が一人だと理解しやすいが、相手が複数だと理解しにくい。
・相手が大人だと理解しやすいが、相手が子どもだと理解しにくい。

・本人が集中している時は聞いていられるが、集中力が切れると聞いていられない。
・本人が安心できる場面では聞いていられるが、不安な場面では聞いていられない。

補聴器や人工内耳をつけている子どもたちにも同じような困難さがあります。

聴力レベルが４０dB（デシベル）以上の中等度難聴や高度難聴のある子どもたちも、補聴器の調整がうまくいっている場合には、補聴器を通して聞くときの聴力レベルが３０～４０dBになり、会話音の一部が聞こえるようになります。

また、聴力レベルが１００dBを超える最重度の難聴がある子どもも、人工内耳を通して聞く時の聴力レベルが３０～４０dBになり、会話音の一部が聞こえるようになります。ちょうど、軽度難聴のような状態になります。

そのために、「補聴器をつけているから聞こえている」と「誤解」されることがあります。これらの子どもたちにも、軽度難聴等のある子どもたちと同じように、「まわりの人から聞こえにくさを理解されにくい」という困難さをかかえています。

子どもの成長への影響

子どもに軽度難聴や片耳難聴がある場合、ことばが曖昧に聞こえているため、よく知っていることばは聞いてなんとか理解できますが、初めて聞くことばは理解できなかったり、聞き間違えたりします。

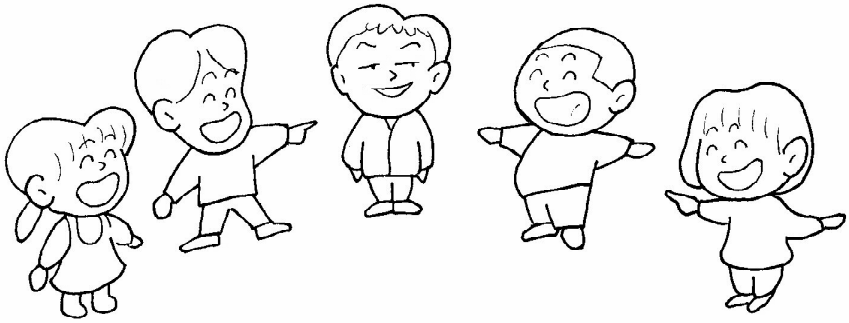
新しいことばや知識を学習する時期にある子どもにとって、このことは大きな問題で、適切な支援がないと、学業の問題に発展する場合もあります。

「なんか、よくわかんない」

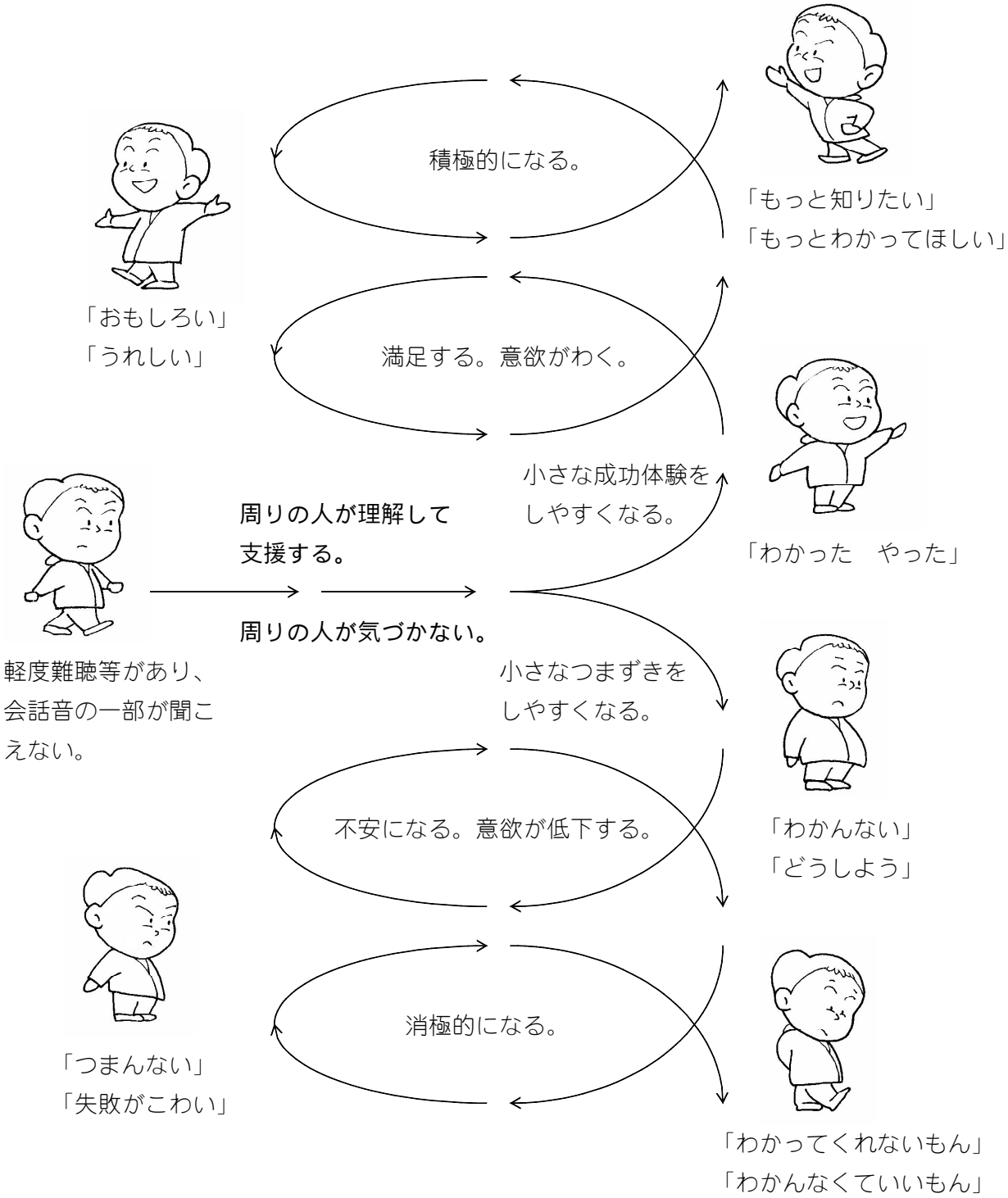
子どもに軽度難聴や片耳難聴がある場合、騒音下で会話を聞き取れなかったり、相手が複数で次々と変わるような場合には理解できなかったりしますので、幼稚園や学校等の集団場面では会話を理解できないことがあります。

人間関係を学習する時期にある子どもにとって、このことは重大な問題で、適切な支援がないと、交遊関係や集団適応の問題に発展する場合もあります。

「みんなどうして笑ってるの？」



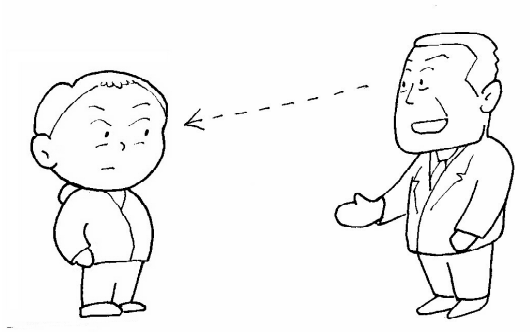
まわりの人が聞こえの問題に気づかず適切な支援ができない場合には、前述のような新しいことばを理解できなかったり、集団場面での会話に参加できなかったりといった小さなつまずきをしやすくなります。それらが繰り返されると、子どもは不安になり、意欲がわかなくなり、消極的になる恐れもあります。もしそうなると、子どもの自我の成長や社会性の成長に影響をおよぼす場合もあります。



支援のあり方

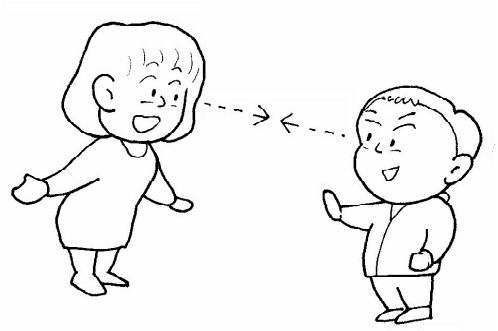
聞こえにくさで困っている子どもを支援するためには、まずその子が聞こえなくて困っている様子や、わからなくて困っている様子に気づくことが大切です。その子の聞こえにくさの特徴を理解した上で、状況に応じて子どもがわかるようになる支援を工夫していきます。

例えば、以下のような配慮です。

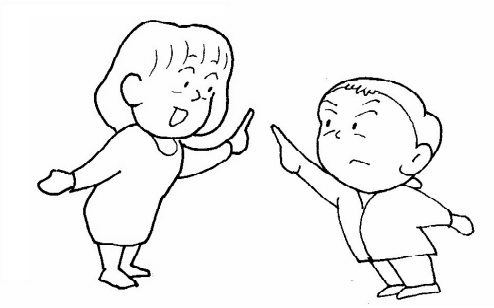


子どもの表情を見ながら、
声の大きさや、話す速さを
加減する。

まわりがうるさかったら
少し近づいて話しかける。
聞こえる耳の方から話しかける。

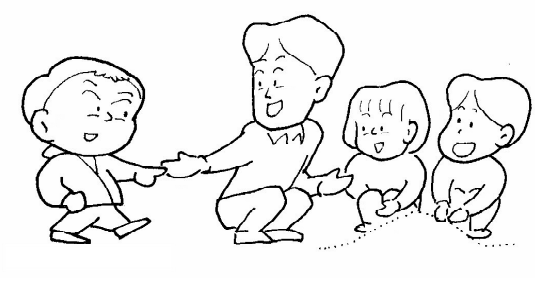


いきなり話しかけないで、
目が合ったときに、話しかける。



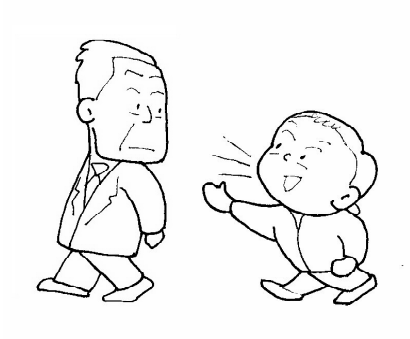
わからない顔をしたら、
繰り返して話しかける。

固有名詞や難しいことばは、
書いて見せる。



子どもを仲間に引き込み、
ひとりぼっちにしない。

このような配慮によって、人の話がわかった体験や、人に話をわかってもらえた体験を積み重ねることによって、「もっと知りたい、もっとわかってほしい」という意欲が育っていくことが重要です。まわりの人々の配慮と、本人の意欲が高まることによって会話への積極性⇨　人の話がわかった成功体験⇨　満足感⇨　さらなる意欲へ、という「よい循環」が生まれることをめざします。



「ねぇ、きいて　きいて」

補聴器は効果があります。ただし・・・

最近は、軽度難聴のある人がつけても、うるさく感じない音質のよい補聴器が販売されるようになってきました。軽度難聴のある人の場合にも、補聴器をつけることによって、人の会話がよりわかりやすく聞き取ることができるようになる可能性があります。

ただし、実際には、軽度難聴のある子どもに補聴器をつけさせようとするときには、様々な問題があって、補聴器をつけさせることが難しい場合があります。

例えば、以下のような問題があります。

〇本人に聞こえにくいという自覚が少なく、補聴器をつけたいという必要感が弱い。
〇まわりの人がつけていない補聴器をつけることに、子どもや親が抵抗感をもつ。
〇補聴器を、ちょうどよく聞こえて、うるさくないように調整することが難しい。
〇うるさくなく、音質のよい補聴器は、高価になってしまう。
〇軽度難聴の場合、身体障害者手帳の交付を受けられないため、補聴器の購入費用が、全額、家庭の負担になってしまう。

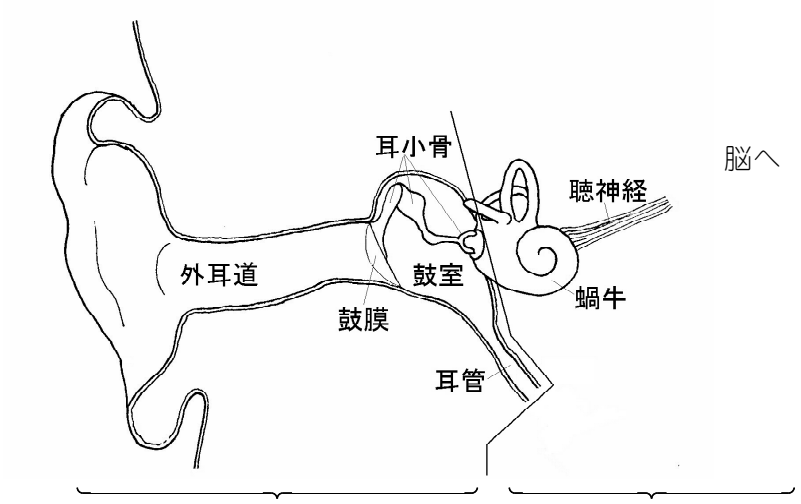
これらの問題を解決するには、時間がかかります。子どもにも親にも「補聴器をつけたい、つけさせたい」という必要感が育っていかないと、補聴器装用は難しいです。

「軽度難聴だから補聴器はいらない」と考えるのでもなく、「すぐに補聴器をつけさせた方がよい」と決めてかかるのでもなく、「もっとみんなの話を聞きたい」と思う子どもの意欲を育てながら、補聴器の装用を検討していくのがよいと思います。

難聴にかかわる基礎知識

難聴は、以下に紹介するように、様々な原因によって起こります。
聞こえにくさが疑われる場合には、難聴を専門とする耳鼻科医を受診し、聞こえにくさの程度やその原因について診断をしてもらうことが大切です。
難聴の中には、治療によって低下した聴力を改善できる場合がありますから、その場合には、適切な治療を受けることが重要になります。
治療による改善が見込めない場合にも、聴力が現状より低下しないように、定期的に難聴を専門とする耳鼻科医を受診することが望まれます。

難聴の種類



この範囲の疾患でおこる難聴を**伝音難聴**といいます。

この範囲の疾患でおこる難聴を**感音難聴**といいます。

伝音難聴
- 外耳道の疾患による難聴
- 鼓膜の疾患による難聴
- 耳小骨の疾患による難聴
- 鼓室・耳管の疾患による難聴

感音難聴
- 先天性感音難聴
- 騒音性難聴
- ウイルス感染による難聴
- メニエール病による難聴
- 薬物による難聴
- 突発性難聴

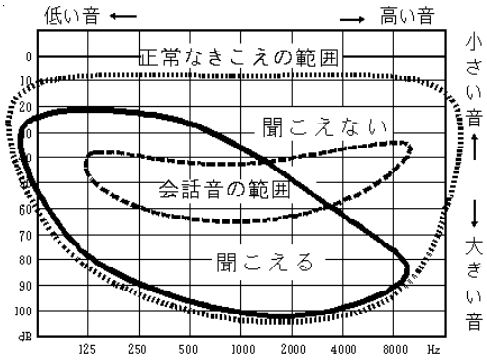
子どもがかかりやすい中耳炎によっても、聴力が一時低下します。ことばを獲得する時期である幼児期には、一時的な難聴でも、ことばの発達に影響することがあります。
また、中耳炎を繰り返すことにより、慢性的な難聴になる場合もあります。
中耳炎だと甘く考えないで、早期にしっかり治療することが大切です。

聞こえにくさがわかりにくい難聴

聞こえにくさも一人一人様々です。どのような音が聞こえ、どのような音が聞こえないのか、その子の聞こえにくさの特徴を理解することが大切です。
ここでは特に、聞こえにくさが周りの人にわかりにくい難聴について説明します。

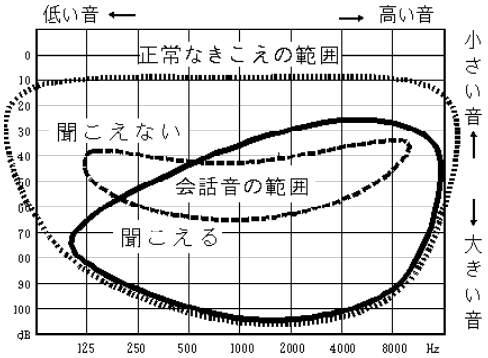
高い周波数の音が聞こえない場合

低い周波数の音は聞こえていて、高い周波数の音が聞こえない場合があります。感音難聴に多い聞こえにくさです。サ行の音などがうまく発音できていない場合があります。



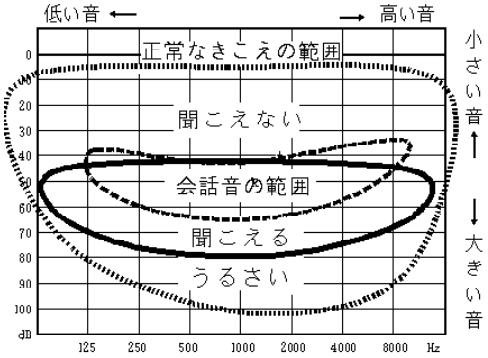
低い周波数の音が聞こえない場合

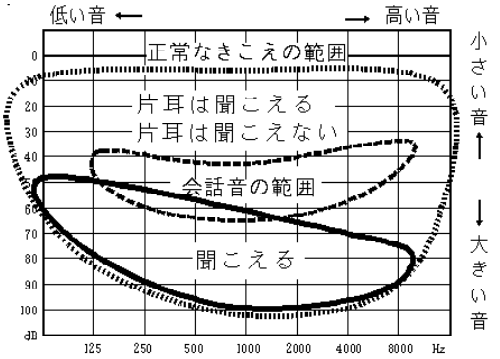
逆に、高い周波数の音は聞こえていて、低い周波数の音が聞こえない場合があります。伝音難聴に多い聞こえにくさです。中耳炎によって起こる場合もあります。



軽度感音難聴の場合

聞こえの幅（ダイナミックレンジ）が狭く、会話音は聞こえても、少し小さな音が聞こえなかったり、少し大きな音がうるさく感じたりします。音に対する反応がよく、発見が難しい難聴です。



片耳が聞こえない場合

片耳は聞こえていて、もう片方の耳が聞こえない場合があります。騒音のあるところで、聞こえない耳の方から話されると聞き取れないことがあります。